



第2章 まちづくり支援と自治体史の編纂

木村, 修二 ; 三村, 昌司 ; 板垣, 貴志 ; 石川, 道子 ; 坂江, 渉 ; 村井, 良介 ; 河野, 未央 ; 添田, 仁 ; 井上, 舞 ; 三角, 菜緒 ; 前田, 結城 ; 佐々…

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 10(平成23年度事業報告書):23-37

(Issue Date)

2012-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003859>



第2章 まちづくり支援と自治体史の編集

大学協定にもとづく灘区との連携事業

神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成制度は、地域の福祉の向上、産業振興、教育・文化・スポーツの振興、人材育成、まちづくりなどの諸分野において相互に協力し、地域社会の発展や活性化に寄与するため、2004年12月に神戸市灘区と神戸大学の間で締結された連携協力に関する協定に基づき、地域の課題の解決および魅力の向上を目的として実施する活動・事業に助成を行い、灘区政の活性化に資することを目的として設けられた助成制度である。

過去に当センターでは、2005年度「篠原地区の昔と今～古文書と古写真～」(史料展示および講演会・冊子作成事業)、2006年度「水道筋地域のむかし」(冊子作成事業)と、当助成事業での活動を行っているが、本年度は、5年振りに応募・採択されたため、この活動が中心となった。

(1) 2011年度神戸大学・灘区まちづくり事業

本年度は、事業課題の一つに「摩耶山の活性化に取り組む活動」が掲げられており、このテーマに取り組むべく、企画を立てた。本年度の企画テーマは「「摩耶道のおおる村の歴史」関係資料調査および講演会開催事業」とした。

摩耶山切利天上寺は、かつて全国にわたって広く信仰を集めていたが、摩耶山と灘区域にあった村々との関係については、歴史的に十分に明らかにされていない。それは史料の寡少さが影響しているが、昭和51年(1976)に天上寺の旧伽藍が灰燼に帰し、その後移転復興したとはいえ、地元住民と天上寺との間に精神的な隔絶が生じた結果も大きい。

こうした事情をかんがみ本活動では、所在確認済みなし未調査の地域史料を博捜し、天上寺を含む摩耶山と地元の村々との深かった関係を歴史的に明らかにする。そして近い将来にはその成果を平易な小冊子にまとめ、地域の方々に当該地域の歴史文化の豊かさに関心を持っていただくことを目指したものである。

なお、「摩耶道をとおる村の歴史」とは、次年度以降に発行を予定している冊子の仮タイトルで

あるが、本年度は発行へ向けた準備にあてるべく設定した事業内容とした。さらに、本年度中の成果を公表すべく、講演会を催すことも企画に盛り込んだ。

事業開始当初、いくつかのテーマを掲げて調査を進めた。その内の一つ、地域史料の調査については、諸事情から当初の目標に対して十分な成果をあげえなかったが、その一方で幸いにも本年度より神戸市文書館に所蔵されることになった「旧摩耶山塔頭王蔵院文書」の公開されたことは、本事業を進める上でまことにありがたいことだった。

王蔵院文書は、総数こそ200点に満たないものの重要な史料を多く含むまことに興味深い文書群である。また、摩耶山麓の五毛地区の旧家大利家の所蔵文書を調査できたことも極めて重要である。こちらは数千点に及ぶかとみられるかなり規模の大きい文書群なので、本年度中に全ての整理を終えることができなかった。しかし、こちらも内容を精査するなかで、「摩耶道のおおる村の歴史」というテーマにふさわしい史料が多く見いだされることは間違いないものと考えている。なお、大利家文書の整理作業は、院生の山本康司君に担当してもらった。

また、自治体史に収載されている近世の旅日記を採集することもテーマに掲げていたが、こちらは、全国の自治体史を体系的に所蔵している尼崎市立地域研究史料館や、東京の国立国会図書館、東京都立中央図書館への出張調査をおこなうことで、かなり採集を進めることができた。西国三十三ヶ所観音巡礼を中心とする旅人が摩耶山に立ち寄るケースはかなり多く、中には近世の摩耶山天上寺を知る上でまことに貴重な情報を含むものもあった。

一方で、当初予定していなかった成果として、摩耶山天上寺への調査を行う中で、当貫主(伊藤浄厳師)や副住職(伊藤浄真師)が、実に多くの摩耶山関係絵葉書を収集されていることがわかった。絵葉書は焼失前の摩耶山の状況を窺う上でこの上ない資料である。当センターではこの絵葉書の整理を申し出て、ご承知いただき、スキャナーでのデジタル化を行った。将来的には、天上寺発行による絵葉書写真集を目指す、今年度末に予定していた講演会は、この絵葉書の公開を中心とする内容にすることとした。

本年度を締めくくる講演会事業は、2012年の3月12日（月）に開催した。講演の会場は、摩耶ケーブル・ロープウェイの利用促進も鑑みて、摩耶山天上寺で行うこととした。これは同時に摩耶山周辺のフィールドワークも行うことを企図した結果でもある。



まず講演会については、天上寺の伊藤浄厳貫主からご挨拶いただいたあと、神戸市文書館で王蔵院文書の整理にあたった森田竜雄氏（財団法人百耕資料館）に、「神戸市文書館所蔵『王蔵院旧蔵文書』について」と題してご講演いただいた。続いて、「戦前の摩耶山関係絵葉書」と題して、木村進行のもと、前述した絵葉書から一部ピックアップして、プロジェクターで投影しながら、伊藤浄真副住職に、旧境内・建物やその他のことについて語っていただいた。

なお、講演会に引き続きフィールドワークも計画したが、この日真冬のような寒気におおわれ降雪があったため、山道通行の危険を考慮し、掬星台広場から天狗岩・奥の院のある摩耶山頂周辺までにコースを短縮した。全体的にタイトなタイムスケジュールとなったため、もっと時間がほしかったというようなアンケート回答もみられたが、概ね好評を得ることができた。次回以降の企画を期待するという意見も多くあった。

3月12日の講演会に先立って、2月18日（土）に神戸高校同窓会館を会場として開催された摩耶山天上寺の歴史を語る会「旧天上寺模型お披露目会」（主催：灘コミュニティーアーキテクト、協力：灘区役所・灘百選の会）において、伊藤浄真副住職とともに木村が「史料にみる摩耶山と天上寺」と題する講演をおこなった。

近世の地誌や紀行文などにあらわれた摩耶山お

よび切利天上寺についての記述を追いながら、近世～近代における摩耶山・天上寺の歴史的展開を概観した。参加者は50名を超えるまことに盛況の会だった。

なお、以上の活動を総括するために、報告書を発行することになっている。

(2) 本年度以前の活動関連

2005年度に制作した『篠原の昔と今』、および2006年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、本年度も断続的に配布依頼が続いた。2012年2月29日現在での残部は『篠原の昔と今』は約400部、『水道筋周辺地域のむかし』は約60部となっている。

（文責・木村修二）

神戸市文書館との連携事業

2006年度より始まった神戸市文書館との地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業を、今年度も継続して行った。文書館の開館日である月曜日から金曜日、午後1時から5時まで、森田竜雄・樋口健太郎・三角菜緒の3名が事業を担当した。

事業内容としては、以下のとおりである。①館蔵資料（古文書・複製資料）の台帳整備。文書群ごとに来歴、点数、所蔵形態（原文書、マイクロ、ネガ、コピー等）、目録の整備状況、配架場所などの情報を整理した。②館蔵古文書の再整理として、井上好太郎家文書・芝家文書の再整理を行った。また、『新修神戸市史』編纂で借用していただくつかの史料群の取扱い確定（寄贈・返却）につき、助言を行った。③新たに公開した史料群のHP向け解説を作成した。④市民のレファレンス対応への協力。⑤館蔵史料群を利用した企画展の実施。2011年10月3日（月）～21日（金）「近代神戸の風景—レファート写真コレクション」の展示および配布資料の作成を行った。期間中の来館者は、1228名であった。

これは、地域連携センターが企画展にかかわるようになった過去3年間で最高の来館者数だった昨年の219名を、さらにはるかに上回った。今年度の企画展は、戦前の神戸の写真という、もともと市民の関心を惹きやすいテーマだったことに加え、『神戸新聞』（10月4日）・『産経新聞』（10月6日）で紹介されたことが、多くの来館

者を呼んだ主要な理由と思われる。

また、今年度から、長らく閉館となっていた平日の午前中について、常時開館ではないが対応可能となった。ただし HP 上での告知が行われておらず、周知につとめるよう助言・協力をしていきたい。来年度も上記事業の継続をはかりながら協力関係を維持し、館の存在意義がより周知されることをめざす。(文責・三村昌司)

神戸市企画調整局との連携事業

2009 年度より神戸市が保有する阪神・淡路大震災関連資料の整理作業は開始された。本年度は、神戸大学からの研究員の派遣はなかったが、(財)神戸都市問題研究所分室(以下、分室)において進められている資料の目録作成と保存方法についての専門知識の提供を行った。

2011 年 4 月 27 日に板垣貴志が分室を訪問し今年度の方針につき情報を交換し、同年 9 月 15 日には、奥村弘、佐々木和子、水本有香、三村昌司、吉川圭太、板垣の 6 名が分室を訪問して専門知識の提供を行った。

また、2012 年 1 月 13 日には、神戸市立地域人材センター会議室(旧二葉小学校)にて開催された「阪神・淡路大震災関連文書企画展一応急復旧活動の記録一」を奥村、三村、板垣の 3 名が訪問した。今後の方針については、来年度 4 月に情報交換会を開く予定となっている。

(文責・板垣貴志)

神戸市を中心とする文献史料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

(1) 中央区北野地区・西脇家文書への対応

2010 年 5 月に寄贈を受けた西脇家文書を主な素材とする「西脇家文書研究会」は、今年度もおよそ月 1 回のペースで継続してきた。同会は今後も継続予定だが、テキストの範囲は、西脇家文書以外にも用いるようになってきている。

(2) 神戸北野美術館における展示協力

昨年度中の「北野村古文書さとがえり展」(2010 年 11 月 3 日～6 日)開催にあたり多大なご協力をいただいたことが機縁となり、本年度より神戸北野美術館における展示に当センターが協力することになった。

神戸北野美術館は、異人館(旧米国領事館)を利用した、私立の美術館で、オーナーをされているのは浅木隆子さんである。浅木さんは、北野・山本地区をまもりそだてる会の会長もされており、昨年度の展示会では、まもりそだてる会として、主に宣伝面でのご協力をいただいたのである。

展示会のあと、浅木さんより直接、神戸北野美術館の改装にあたり、なかば常設化するかたちで、北野村の歴史についての展示スペースを設けたいので、是非協力をという要請をいただいた。

ある展示室の 1 壁面に設えられた展示ケース一つ分だけではあるが、私たちの調査成果を継続的に展示公開できるとあって、まことにありがたい申し出であった。展示内容は、ほとんど私たちにご一任いただけるということで、展示物品などもご提供いただけることになった。

展示は、絵図パネルを中心にいき、古文書室蔵の西脇家文書、北野村文書の現物も貸し出して展示してゆくことも要請された。時々展示替えなども行いながら、現時点でも展示を継続している。

(文責・木村修二)

財団法人住吉学園との連携事業

財団法人住吉学園との連携事業は、学園が管理している住吉歴史資料館(本住吉神社境内に所在)の運営を中心として進められている。その運営は、学園より要請された地元有志が中心となっており、当センターからは、奥村・木村が専門委員会としてそのサポートを専門的な立場から行っている(専門委員会には、松下正和氏<近大姫路大>も継続して入っていただいている)。

なお、財団法人住吉学園の幹部の方々が交代され、資料館館長を兼ねる学園理事長理事長に中島慎賀さんが就任された。

以下、今年度の活動の概要を記す。

(1) 『住吉歴史資料館だより』の発行

今年度の『住吉歴史資料館だより』は、発行が大幅に遅れ、年度末に近い 2 月 20 日に第 4 号がなんとか発行されたにとどまった。次年度以降、定期発行へ向け改善が求められる。

第 4 号では、中島新理事長による「ごあいさつ」に続き、木村執筆の「《『住吉村誌』を読む》「鼻高山」の手水鉢はいったいどこに？」

神戸元町商店街連合会との連携事業

神戸元町商店街連合会（みなと元町タウン協議会）との連携関係は、2009年12月に「西国街道モニュメント」の設置事業以来つづいている。

2010年度は、同連合会の奈良山貴士氏が幹事がつとめる社団法人・神戸経済同友会（平成22年度地域開発委員会）の「『神戸海港都市づくり研究会』（仮称）の設置による戦略的かつ継続的な都市づくりへの提言」（平成23年2月）の作成に向けての文案作成に協力した。

今年度はそれを受け、2011年6月13日、同経済同友会の地域開発委員会主催の講演会で、奥村弘副センター長が、「海港都市の力 ～兵庫・神戸の歴史性を考える～」と題する講演会をおこなった。（文責・坂江渉）

神戸市淡河における連携事業

これまで、石峯寺の史料調査や、神戸市教育委員会・淡河町自治協議会と連携した歴史セミナーの開催などをおこなってきたが、双方とも事業が一区切りついたため、5月17日に神戸市教育委員会と今後の事業について打ち合わせをおこない、今後は小学校との連携などを模索していくこととなった。（文責・村井良介）

よみがえる兵庫津連絡協議会への協力

兵庫津の歴史文化を活かしたまちづくりをめざし、兵庫区の商店主・中央市場・寺院・神社等が発起人となって「よみがえる兵庫津連絡協議会」が発足した。兵庫区まちづくり課も協力を行っている。

今年は同会のメンバーが中心となって大河ドラマ「平清盛」とタイアップした事業が精力的に進められている。河野未央もオブザーバーとして名を連ねているが、月例会議は日程があわず、本年度は出席が叶わなかった。次年度以降積極的に出席をしていきたいと考える。（文責・河野未央）

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26

日に社会文化にかかわる連携協定が結ばれ、それ以来さまざまな共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は、以下の通りである。

(1) 小野市立好古館 一平成23年度特別展（地域展）「下東条歴史街道をゆく」の開催協力と博物館実習の実施

好古館の地域展については、一昨年度まで、小野市内の各地区の子供たちによる「調べ学習」を基軸にしたものであった。しかし昨年度からやり方が変えられた。下東条地区地域づくり協議会では、地域の活性化をはかるため「下東条地区まちづくり活性化計画」を提言（4年間事業）。この中には豊かな自然と歴史をいかしたまちづくりの提言も多く盛り込まれている。そこで地域づくり協議会、各自治会、学校が共同して、地域の歴史調査をおこない、将来的にその成果を「下東条文化財ウォーキングプラン」としてまとめることを決定。本年度の地域展づくりは、昨年度と同様、こうした作業の一環に組み込まれ、その準備作業の成果の一端を公表する場に位置づけられた。

夏休み以降、今年度の展示会および「ウォーキングプラン」用のマップ作り等をめざして、基礎的な準備作業として、各地区（おおむね下東条地区に含まれる大字）ごとの歴史文化の聞き取り調査が実施された。

センターではこの聞き取り作業に協力（担当教員の坂江が参加）するとともに、博物館実習生1名が「実習課程」の1つとしてこれに参加した。来年度以降の聞き取り調査は、中番小学校区を中心にしておこなわれる予定である。

なお地域展「下東条歴史街道をゆく」の総入場者数は1,236人であった（会期は11月12日～12月25日）。

(2) 「青野原収容所俘虜がみた日本 ～新発見の俘虜撮影写真～」展の開催協力

2005年度、好古館で開いた地域特別展「青野原俘虜収容所の世界」展、および俘虜たちの演奏会の再現コンサートについては、2008年9～10月、オーストリアのウィーンで「里帰り展示会」を開き、2009年11月には、東京にて「青野原俘虜収容所展 in Tokyo 2009」を開催した。

これを受けてもう一度、小野市内でこれまでの成果を集大成する計画が持ち上がり、結局、2011年10月、好古館で展示会を開催することが決定。この間、新発見された「収容所」関連の写真

資料の調査成果を発表コーナーや、神戸大交響楽団有志による記念コンサート等をおこなうことになった。

2011年3月から、人文学研究科地域連携センター、地域連携推進室、研究推進部連携推進課産学官連携グループ、神戸大学交響楽団、人文学研究科と発達科学部の有志教員（大津留厚・長野順子・田村文生の3氏）、人文学研究科学術推進研究員の石井大輔氏などによって構成される「学内実行委員会」が合わせて6回開かれ、また小野市立好古館との「拡大実行委員会」（現地での打合せも含む）を4度開催した。これにもとづき、つぎの企画を小野市とともに共同開催した。

①企画展「青野原収容所俘虜がみた日本 ～新発見の俘虜撮影写真～」（小野市立好古館／2011年10月1日～30日）

会期中の入場者数は1719人だった。

②青野原収容所再現コンサート「時空をわたる楽の音」@神戸大（2011年10月14日19時開演／出光佐三記念六甲台講堂）

- 神戸大学交響楽団有志が「エグモント序曲」「レヴリ」「歌劇バクダッドの太守序曲」「交響詩忠臣蔵序曲」を演奏。指揮は田村文生准教授。
- 大津留厚教授によるミニ講演と長野順子教授による曲目解説。
- 大雨が降る中、約70名の市民・学生・職員等が参加した。

③青野原収容所再現コンサート「時空をわたる楽の音」@小野市（2011年10月16日1330開演／小野市うるおい交流館エクラホール）

- 町の音楽好きネットワーク（習志野俘虜収容所に関わる）が、「ヴァイオリンのための閉じておくれ僕の眼を」「春の声」「ハンガリー舞曲6番」「僕たちちやコーラス野郎」「アヴェマリア」「美しく蒼きドナウ」「閉じてくれ僕の眼を」を演奏
- 神戸大学交響楽団有志が「エグモント序曲」「レヴリ」「歌劇バクダッドの太守序曲」「交響詩忠臣蔵序曲」を演奏。指揮は田村文生准教授。
- 大津留厚教授によるミニ講演と長野順子教授による曲目解説。
- 快晴の中、市民および大学関係者を合わせて328名の入場者があった。

（※）なおそれぞれの企画に関わる「図録」、およびコンサート開催時の配付冊子の作成については、石井大輔氏が担当した。また宣伝PRに関して、9月29日、兵庫県庁記者クラブにて記者発表をおこなうとともに、学内でのコンサートについては、新聞折込宣伝等も実施した。



(3)ブックレットの作成、刊行

今回での展示・コンサート企画に関連して、実行委員会内部で、関連するブックレットを刊行することが決まり、石井大輔氏を神戸大側の主たる編集事務担当者として、大津留厚・奥村弘・長野順子編『捕虜として姫路・青野原を生きる 1914-1919 箱庭の国際社会』が、神戸新聞総合出版センターから刊行された（2011年10月20日）。センターではこのブックレットを学生向け教材の一つとして活用するとともに、小野市との連携成果の一つとして宣伝につとめている。

（文責・坂江渉）

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

(1) 生野古文書教室

平成18年度に立ちあげられた生野古文書教室（もと古文書初級教室）の方々が、センターと協力して、「御仕置五人組帳（上生野村）」（生野書院所蔵）の翻刻・現代語訳を行った。

これは、古文書の内容を平易な文章に直すことで、子供でもわかるような冊子にまとめて出版することを目的とした事業である。地元の古文書を読むだけでなく、その成果を市民が市民に還元するという意義を持つ。

今年度も月1～2回のペースで翻刻・現代語訳の作業を続け、これに添田仁・三角菜緒が参加した。2012年4月に冊子を発行予定である。

(2) あさごの歴史と古文書講座

昨年度に引き続き、朝来市全域を対象として「あさごの歴史と古文書講座」を3回開講した。また、同時に古文書に関する相談会も行い、身の回りの古文書についての情報を寄せてもらった。

講座の日程、内容、参加者は以下の通り。

■第1回 平成23年8月20日

- ①「粟鹿のカミの系譜」(古市晃)
- ②「古文書に触れてみようⅠ」(澤井廣次・神戸大学D)

■第2回 平成23年10月22日

- ①「朝来の山城と山岳寺院」(西尾孝昌・朝来市文化財保護審議会委員)
- ②「昔の人の名前を読んでみよう」(三角菜緒・神戸大学M)

■第3回 平成23年12月17日

- ①「開港場神戸で石炭を掘る」(添田仁)
- ②「古文書に触れてみようⅡ」(澤井)

当初2月18日に第4回を企画していたが、当日大雪のために中止となった。講座自体は概ね好評で、来年度も引き続き実施する予定である。

(3) 生野書院所蔵文書の整理

生野書院所蔵・吉川家文書の再整理を行った。文書は、一時的に神戸大学文学部・添田研究室に移管し、整理を三角菜緒が担当した。

吉川家は、生野銀山において掛屋・郷宿・山師を営んでいた家である。同家史料は、江戸時代中期～明治期の史料を中心に構成されていた。整理作業は、目録の作成と文書の中性紙封筒への封入を中心におこなった。今年度で、1934点の同家史料の整理をすべて完了した。

今後は、市民の利用に供するために、とくに利用頻度が高いと考えられる鉾山の坑道絵図など、文書の修復を進める。

(4) 新出古文書の整理

○枚田家文書

朝来市教育委員会からの依頼。近世以降の史料について、その保管状況の確認と今後の調査・活用方針を見極めるために、10月13日、朝来市と神戸大学との連携事業のなかで現状調査を実施した。地域連携センターからは、添田仁・澤井廣次・三角菜緒が参加した。当日は、ご当主の枚田啓三氏への聞き取り、蔵内の現状記録を行い、成果は朝来市教育委員会に提出した。

今後は、一時的に朝来市教育委員会で引き取

り、来年度、連携事業のなかで整理を進め、内容の調査し、市民への成果の還元についての方策を検討する予定である。

1月26日には、添田仁と三角菜緒が、一時保管場所となる朝来郷土資料館を訪問して、保管環境についての助言を行った。3月末には、現物の移管作業を行う予定である。

○太田虎一旧蔵資料

生野郷土史家の太田虎一旧蔵資料の処遇について、石川通敬氏を介して、虎一氏の孫にあたる太田公士氏から依頼を受け、11月5日、添田仁・三角菜緒が仮整理作業を行った。当日は67点の表紙撮影を行い、後日目録を作成した。今後は全頁撮影を行い、市民の利用に供するための環境づくりを進める。

(5) 石川家文書の整理

昨年度に引き続いて、石川家が所蔵する古文書の整理を生野書院で行った。

所蔵者が移管してきた古文書は、すべて中性紙の古文書箱に詰め、随時、整理と写真撮影を行った。今年度は、9月22日に7名で行った整理作業に加えて、現地在住の山崎實氏・加門洋子氏に文書の撮影を依頼し、井上舞がその撮影作業の統括、データの整理を行った。撮影期間は下記の通りである。50日間の撮影で、日記・土地関連文書・鉾山関連文書を中心に約300点の撮影を行った。作業開始当初は、撮影担当者が初心者であることもあって、撮影ミスも多く、また、時間もかかっていたが、都度、撮影方法の確認を行ったことによって、現在はかなりスムーズに撮影が行われている。撮影済みのデータについては、整理番号を付し、添田研究室に保管中である。今後も同様の作業を続けていく予定である。

<撮影期間>

1ターム

平成23年8月4日～8月26日

2ターム

平成23年9月8日～10月6日

3ターム

平成23年10月20日～11月11日

4ターム

平成24年1月12日～2月3日

5ターム

平成24年2月16日～3月9日

※各ターム内で山崎・加門は10日間勤務。井上

は基本的に4日間勤務。

(6) 石見銀山の視察

3月26-27日、朝来市教育委員会のメンバーとともに、石見銀山の視察を行った。これは、佐渡・石見・生野といった鉱山間で共同・比較研究を進め、日本鉱山史研究の深化を図ることを目的とするものである。地域連携センターからは、添田仁・井上舞・三角菜緒が参加し、石見銀山資料館等を視察した。

(文責・添田仁、井上舞、三角菜緒)

丹波市における連携事業

2010年度に引き続き、今年度も丹波市との連携協定にもとづく事業を展開することができた。本年度の事業成果と課題の概要は以下の通りである。

(1) 歴史講座・古文書相談・展示会の実施

■「講座 丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」

昨年度に引き続き、「講座・丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」(以下、連続講座)を開催した。本講座の目的は、丹波市内旧6町それぞれの歴史に関する講座を「現地説明会」方式で開催し、市民の歴史文化に対する関心を喚起することにある。スケジュールは以下の通り

- 6月18日 坂江渉「古代の氷上郡と人々の生活」(春日住民センター) / 古文書相談件数 2
 - 7月16日 前田結城「柏原歴史民俗資料館所蔵の領主関係文書について」(柏原住民センター) / 古文書相談件数 2
 - 9月17日 木村修二「描かれた村の景観—山南の村絵図を読み解く—」(山南住民センター) / 古文書相談件数 2
 - 10月22日 松下正和「反古となった古文書からみる青垣町の近世の暮らし～発見!隠れた地域遺産」(青垣住民センター) / 古文書相談件数 2
 - 11月19日 河野未央「田中家文書の世界」(氷上住民センター) / 古文書相談件数 3
 - 1月22日 市澤哲「丹波の南北朝時代」(ライフブアいちじま) / 古文書相談件数 4
- 本講座の参加者からは、毎回アンケートにおいて連携事業の継続を望む意見が寄せられている。また連続での聴講の事例も多数認められる。連

続講座はもとより、連携事業そのものへの理解が講座参加者より得られていることの証左といえる。また、古文書相談会では毎回2~4件の相談が寄せられている。また本講座で知り合った住民の方から文書の所在情報をお寄せいただき、それが新規の調査に結びつくこともあった。新規の取り組みであったが、参加者からの積極的な反応や古文書相談会の効果を把握することができたといえる。講座から派生する成果がますます増えてきていると思われるので、来年度も継続して行いたい。

■「船城歴史探索街道」での講演・史料展示会

2011年11月20日、春日町歌道谷地区において区有文書の展示会と展示史料に関する講演会を開催した。展示会の開催に当たっては、本センターより史料の選定、展示図録の執筆、および展示方法の指導などの援助を行った。講演は、前田研究員より「古文書からみた近世の船城地区—裁許状・嘆願書」と題して行われた。立ち見が出るほどの盛況であった。

船城地区では文化祭などのイベントが各大字持ち回りで行われている。要請があれば、今後もセンターとして積極的に協力していきたい。

(本講座・史料展示会の様子は2011年11月21日付神戸新聞、同月24日丹波新聞に掲載された)

■その他の講座活動

木村研究員が以下の講座を担当した。

- ①丹波古文書倶楽部(自主運営サークル)でのチューター活動: 2011/5/14、6/11、7/9、8/13、9/10、10/8、11/12、12/10、2012/1/14
- ②TAMBA シニアカレッジ教養講座「丹波の古文書」での講師活動
2011年5月13日「古文書とは何か?」(青垣住民センター)
2012年1月14日「古文書から覗く丹波市域の江戸時代~そのとき村でなにが起きたか」

(2012年2月5日付丹波新聞に本講座に関する記事が掲載された)

(2) 丹波市内古文書調査

資料館・自治会・旧家、および寺社の所蔵文書調査も行った。調査・整理・保全作業を行った文書名は以下の通り(カッコ内は調査日)。

■資料館所蔵文書

青垣歴史民俗資料館保管文書(2011/6/3、

8/14) / 植野記念美術館所蔵織田文書
(2011/6/5) / 柏原歴史民俗資料館所蔵飯田家
文書(2011/6/3)、同館所蔵田中家文書
(2011/7/16～17)

■自治会文書

山南町：谷川区有文書(2011/10/22) / 春日町
：棚原区有文書(2011/6/25、8/13、9/30、
10/29、11/28、12/27、2012/1/25、2/25) 歌道谷
区有文書(2011/10/6、10/23、12/9、
2012/1/17)、松森区有文書(2011/6/19)

■旧家文書

山南町：金屋惣代文書(2011/8/8) / 氷上町：
足立家文書(2011/6/4)、田國男氏所蔵文書
(2011/6/18)、吉田司家所蔵文書
(2011/7/17)、佐中ますみ家所蔵文書
(2012/2/10～11) / 春日町：秋末宏幸氏所蔵
文書(2011/6/19) / 市島町：吉見勝弘氏所蔵
文書(2011/8/12)

■旧寺社文書

山南町：常勝寺文書(2011/10/22、11/28)、慧
日寺文書(2011/11/28) / 氷上町：達身寺文書
(2011/6/4)、内尾神社文書(同左)

春日町棚原・歌道谷・松森区有文書以外は今年
度新たに調査に着手した文書である。そのほとん
どは、上述の講座で出会った方々より寄せられた
情報によるものである。棚原・歌道谷地区での調
査は講座や印刷物の形で成果となった。

調査の結果以下の問題が判明した。第一に植野
記念美術館所蔵織田文書における文書の一部が本
体文書群から離脱、第二に慧日寺所蔵の応永8年
(1402)「久下重之寄進状」の所在不明である。
一方、特筆すべき新出史料として、佐治与九郎一
成(江の最初の夫)の署名のある山林竹木伐採の
禁制が発見された。

これらの文書の整理については、柏原歴史民俗
資料館所蔵飯田家文書と春日町歌道谷区有文書が
すでに全点目録作成を終えている。ただし、後者
については付箋の脱落の恐れが大きいため、ラベ
ル貼りをするなどの工夫が必要であると思われる。
これは来年度の課題とする。

(3) その他研究成果の発表

- ・広報たんばへのコラム寄稿…2011年4月より
毎月連載
- ・春日町棚原瑞巖庵関係史料の調査まとめ…A3
両面4頁、3月末同地区全戸配布

(文責・前田結城)

連携協定を結んだ加西市との連携事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5
月16日に締結された。これにもとづき昨年度ま
で加西市鶉野町の「旧姫路海軍航空隊基地」跡の
歴史遺産基礎調査をおこなった。

今年度はめだった活動はできず、青野原俘虜
収容所の共同研究、加西市史での編集史料の保全
・活用、およびその人材育成に向けての情報交換
などを、市史編さん部局との間でおこなった。

(文責・坂江渉)

伊丹市立博物館との連携事業

震災関連資料の収集・分析をおこなうととも
に、『伊丹震災史』の本文編の刊行をめざした。

(文責・佐々木和子)

宝塚市の山本共有財産管理組合との連携

2010年4月8日～11日に開催された「山本村
の歴史資料展～古絵図にみる山本村の歴史と園芸
産業展」(「植木まつり」と同時開催、於：あい
あいパーク2階共同利用施設山本開館)の成果を
もとに、本年度は松下正和(近大姫路大学教育学
部講師)・石川道子らとともに河野未央が参加
し、図録『江戸時代の古絵図にみる山本村の歴
史』を作成した。作成にあたっては、ほぼ隔月に
開催される会議のほか、夏から秋にかけて数度フ
ィールドワークを実施した。本年度3月末に刊行
予定である。

また2012年には図録刊行を記念し、再度「植
木まつり」と同時開催での企画展示を検討中であ
る。

(文責・河野未央)

尼崎市における連携事業

引き続き、中世長洲荘関係の史料を多く含む京
都大学総合博物館所蔵「宝珠院文書」についての
研究会をおこなった。2011年3月10日の第11
回の研究会では、小橋勇介「長洲荘の堤につい
て」の報告がおこなわれた。4月28日の第12回
の研究会では、長洲荘の悪党事件に関わって見え

る齋藤氏の人物比定をめぐる市沢哲氏の報告と、これまでの成果の整理がおこなわれ、今後の成果のまとめや公表の方法などについて議論した。
(文責・村井良介)

たつの市との連携事業

たつの市との間では、旧新宮町の『播磨新宮町史』の編纂事業以来、密接な連携関係を保っている。本年度の活動については、以下の通りである。

(1) 神戸大学近世地域史研究会

引き続き龍野城下町人である林田屋平兵衛が記した『観聞記』の翻刻作業を行った。本年度は参加者全員で協議し、研究会当日の進行、レジメの準備等を参加者のあいだで割り振るなど、より参加者の自律性・主体性の高い運営方法に改変された。

本年度までに『観聞記』の翻刻内容については、研究会参加者の研究ノートとともに『観聞記(一)』として報告書を刊行する予定であったが、諸々の都合により叶わなかった。現在、報告書の編集作業を会の参加者で分担して準備を行っており、次年度上半期には刊行予定である。

また、本年度は「いひほ学研究会」という地元の研究会とのコラボレーションも叶った。2011年6月18日のいひほ学研究会6月勉強会の場にて河野未央・山田修士(神戸大学近世地域史研究会メンバー)の2名で「近世の往来と地域の人々」と題して主として近世の旅をテーマに、『観聞記』の内容を読み解き、新たに判明した内容について報告した(於たつの市立揖保川公民館)。

当日の参加者は約60名。質疑応答では多くの質問が寄せられるなど、たいへん盛況であった。
(文責・河野未央)

(2) 「八瀬家で学ぶ歴史 ～築200年の建物で古文書教室～」の開催協力

5月29日の台風2号の被害をうけた指定文化財「八瀬家住宅」の2枚の襖の下張り文書の分析と展示をめぐり、新たな事業が始まった(襖の解体・修復等の経緯については第3章を参照)。

たつの市教育委員会では、毎年11月の文化財保護協調月間に、八瀬家の特別公開をしている。本年度は新たに発見された襖の「下張り文書」の研究成果や地区の歴史(揖西町中垣内地区)等を

記した展示・文書解説をおこなうことが決まり、11月5日(土)～6日(日)の2日間、八瀬家特別公開「八瀬家で学ぶ歴史 ～築200年の建物で古文書教室～」が開催された(主催はたつの市教育委員会、八瀬家文書研究会)。



本センターは、史料ネットとともに、この企画の協力団体となり、パネル展示や当日の資料解説等を援助した。2日間の見学者は251名(初日117名、2日目134名)であった。

来年度はこの成果をうけ、発見された古文書等をさらに整理・解説する人材の育成を中心とする事業をすすめることが決められている。
(文責・坂江渉)

三田市との連携事業

(1) 九鬼家文書目録の整理事業

今年度は、三田藩家老九鬼家文書群のうち第2次調査分の目録作成作業をおこない、3月末に第1次調査分と併せて詳細目録を刊行した。九鬼家文書は、九鬼家住宅が三田市へ移管されるさいに確認された大規模資料群である。具体的な目録作成作業および目録データの再点検、改訂作業、目録体裁整備は、板垣と澤井廣次が担当した。昨年度の刊行目録とは異なり、今年度は史料の詳細情報を重視した体裁を採用したのが特色である。

(文責・板垣貴志)

(2) 市史編集室と連携した兵庫県立三田祥雲館高校の「歴史研究入門」への講師派遣

兵庫県立三田祥雲館高校との間では、昨年度から三田市生涯学習課(市史編さん担当)を通して、高校生及び市民向けの講座やワークショップを開催し、大学・自治体・学校の三者連携の可能

性を模索してきた。

今年度は、同校で4月から9月まで実施された「歴史研究入門」（選択型の課題学習）に講師を派遣するなどの形で連携を行った。奥村弘事業責任者の講演を皮切りに、「歴史を学ぶ・調べる基礎」「歴史資料に触れてみる」「近世の地域について知る」「近現代の地域社会について知る」の講義・ワークショップをセンター関係教員と三田市史編さん担当が行い、6月上旬からは「地図を読み解く」をテーマに高校生自身が班別課題学習に取り組んだ。「歴史研究入門」には高校生のほか、三田市生涯学習課（市史編さん担当）の呼びかけて地域住民も参加し、高校生の課題学習に対して適宜アドバイスをを行った。



研究成果は9月に2度に分けて発表された（初回は中間発表、その後の修正期間を経て2回目が最終報告）。発表に対しては、センター関連教員、三田市史編さん担当者、さらに地域住民が講評を行った。

大学・自治体・学校の三者連携としての試みであるが、高校生と地域住民とを同じ場で学ばせることの難しさ、大学と高校との距離などの問題が浮かび上がってきている。また、三田市史編さん担当者の負担が大きくなっていることをどうするかが今後継続できるかどうかの課題と言える。

（文責・河島真）

三木市との連携事業

昨年度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業に「三木市文化遺産活用・活性化事業～三木市文化遺産再発見によるまちづくり～」が採択された。三木市観光振興課の担当者および三木市観

光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群（古文書・書籍）の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

具体的には、下張り文書剥がし作業班、古文書解読作業班、書籍整理作業班の3グループの活動を支援した。前者に対しては、以前より活動を指導してこられた尾立和則氏（保存修復専門家）からのアドバイスを受けた。後者に対しては、三村、板垣が対応して下張り文書の解読作業および書籍整理を進めた。

今年度は、三木市の歴史文化に関わる1回の歴史講座と4回の古文書講座、1回の展示補助をおこなった。歴史講座（2011年5月7日、旧小河家別邸）では、板垣が「旧玉置家住宅伝来の消息文について」と題して講座をおこなった。

また、古文書講座の内容は、第1回（2011年8月3日）は、旧玉置家の襖下張り文書である切支丹宗門改めを用いた。第2回（2011年9月29日）、第3回（2011年12月1日）では、三木市有宝蔵文書を用いた。第4回（2012年3月1日）は、襖下張り文書のなかから、加古川舟運関係の史料と高男寺村の人別送り状を用いた。これらの講座内容は、後日の展示へ活用された。旧玉置家住宅2周年記念の2012年2月20日に向けて、史料解読や展示キャプションを作成した。

また、今年度は冬期古文書合宿（2012年2月23日～24日）を三木市でおこない、旧玉置家住宅での歴史文化を活かしたまちづくり活動につき、市民を交えて討論会も開催した。

（文責・板垣貴志）

明石市との連携事業

(1) 旧明石藩家老黒田家資料の調査

前年度に明石市から調査依頼のあった旧明石藩家老黒田家資料について、今年度は具体的に資料の調査整理を行いながら、全資料をデータ化し目録作成を行った。資料内容は古文書約350点、絵画（軸装、まくり、額装、扁額、屏風約200点）、書（軸装、まくり、扁額約40点）、短冊（まくり、額装約60点）、工芸（陶磁器、漆工芸、金工、武具甲冑、竹細工・木製品、貨幣、袱

紗、着物等約 1,000 点) に分類しそれぞれ作業を行った。

古文書調査は山形隆司氏、山崎善弘氏に依頼した。現地での写真撮影、調査整理は山形隆司氏が中心に行った。古文書、軸装の絵画と書ともに目録番号ごとに文書箱に納め、資料には短冊で番号を付した。額に入った資料については現状のままにした。

工芸品については、前年度の見積もりをはるかに上回る量が出たため、当初計画の 20 日の調査日程を 33 日へと大幅に増やさざるを得ない状況となり、学部生の森下絵理香、稲田真也、松下充弘、大学院生の金潤煥、萬田可奈子、前澤正之に調査補助と撮影補助のアルバイトを依頼した。また、糊付けできる資料については、直接目録番号をラベルで付して整理した。また、11 月以降は大学院生の増澤駿に 11 月 11, 18, 25 日、12 月 9, 16 日、3 月 9, 16 日の全 7 日間データ整理と工芸調書のデータ化を依頼した(これらの具体的な作業内容については、本事業の事業報告書を参照のこと)。

また 2011 年 11 月 29 日に調査途中状況を明石市文化財審議委員(4 名)が調査現場を視察に訪れ、黒田家資料概要を説明した。

以上の作業を通して、今年度は資料を長期間保存できるように分類整理し、全資料の目録と写真データを作成した。今年度整理した黒田家資料は今年度中に明石市が明石市立文化博物館に移管することで同意している。来年度は資料の研究と活用について更なる発展が期待できる。

(文責・橋本寛子)

(2) 地域文化財普及・活用事業へのオブザーバー参加

明石市教育委員会文化財係では、今年度から、上記の黒田家資料の調査と並行しつつ、明石市内の身近な歴史遺産を調査して、その成果にもとづく「歴史マップ」を作成し、それによる地域活性化をめざす「地域文化財普及・活用事業」が始められた。前小野市立好古館長の 大村敬通氏を委員長とする実行委員会が立ち上がり、地域連携センターからは添田と坂江がオブザーバー参加して(5/19、6/29、8/10 など)、活動へのいくつかの助言等をおこなった。

今年度の活動は、明石川以東の地区を対象とし

ておこなわれ、その成果のマップが 3 月末に発行される予定である。来年度以降、明石川以西の 2 地域を対象とするマップを作成する計画が立てられている。
(文責・坂江渉)

高砂市への協力

坂江渉が 2011 年 5 月 1 日付で「高砂市文化財審議委員会委員」に任命され、市の文化財行政および文化財指定等について審議した(3 回開かれた委員会に参加)。
(文責・坂江渉)

南あわじ市での連携事業

兵庫県教育委員会文化財室の紹介をうけ、2011 年 6 月 20 日、南あわじ市社会教育委員長の木田薫氏と南あわじ市活性化委員会の関口功氏、発達科学部の伊藤真之教授がセンターを訪れ、南あわじ市の沼島・榎列・阿万地区での、歴史文化を活かしたまちづくり事業への協力要請があった。

これを受け坂江が、まず各地区を巡見し地元の方々と懇談をするとともに(7 月 13 日)、その後、歴史文化を活かしたまちづくりについて、さまざまな助言等をおこなう機会を設けた。とくに明石市の「地域文化財普及・活用事業」の取り組みを参考にしてもらうため、木田氏や関口氏に同委員会へのオブザーバー参加(8 月 10 日)を要請したり、また逆に 9 月 8 日、南あわじ市役所西淡庁舎で開かれた「南あわじ市歴史のまちづくり 古事記編纂 1300 年祭検討会」に、明石市の 大村敬通氏や田下明光氏(ともに明石市文化財審議委員)を招くなど、各事業の相互連携と情報交換をすすめる場をつくるように努力した。

その結果、榎列地区での歴史マップ作りなど、事業そのものはある程度すすみ始め、2012 年 3 月 3 日、阿万地区で開かれた講演会では、坂江が兵庫県内における歴史遺産を活用したまちづくりの事例紹介をおこない、地域歴史遺産の保全・継承・活用の重要性について述べた(南あわじ市活性化委員会主催。約 70 名参加)。

なお本事業に関する神戸大側の旅費等については、平成 23 年度神戸大学地域連携事業「南あわじ市における『国生みの里プロジェクト』への支援」(事業責任者・伊藤真之教授)の支援を受けた。
(文責・坂江渉)

養父市との連携事業

養父市教育委員会との間では、昨年度、共同型協力研究「大規模史料群（明延鉦山資料）の詳細調査」事業が行われた（研究期間は 2011 年 1 月 4 日～3 月 31 日）。

本年度はこの事業を踏まえ、明延鉦山に関連する近世史料の共同調査等をめざすことが、2011 年 5 月 18 日の打合せ会議（朝来市生野町にて）が決められたが、さまざまな事情により、具体化はできなかった。（文責・坂江渉）

猪名川町との連携事業

猪名川町との間では、すでに 2009 年度以来、猪名川町生涯学習センター主催の市民向け講座「リバグレス猪名川」の開催協力をおこなってきた。今年度は、2011 年 5 月から約 1 年かけて開かれる『リバグレス猪名川（第 13 期生・A コース「歴史と文化」）』について、講師派遣した。

「猪名川流域と古代の王宮」「古代びとの生活と食事情」「地名の由来のクニの成り立ち」など、可能な限り、猪名川町に関わる歴史素材を用いつつ、原始・古代社会の歴史の流れを考え講座を用意した（全 15 回）。

講師陣は神戸大学のほか、大手前大学・芦屋市教育委員会・神戸市外国語大学などの古代史研究者に依頼した。来年度は中世史篇のコース内容が決定している。

（文責・坂江渉）

福崎町との連携事業

2011 年 5 月 21 日には神崎郡歴史民俗資料館連続講座第 1 回「地域の歴史文化遺産は郷土のたから～郷土への誘い～」で、河野未央が「古文書からみる福崎～郷土の歴史資料を読み解く力」と題する報告を行った。この報告は、8 月 18・25 日・9 月 1 日の計 3 回実施した古文書初級教室の告知・呼びかけの意味もあった。古文書教室は盛況で、次年度の開催も検討中である。

また連続講座第 2 回（7 月 9 日）では、坂江渉が「柳田のふるさと～神崎郡の神話～」、第 4 回（11 月 12 日）では、山崎善弘が「三木家と柳田國

男」と題した講演を行った。

両講演は、8 月 6・7 日に福崎町制 55 周年記念事業（地域連携センター後援）「柳田國男 50 年祭・第 32 回山桃記 柳田國男と福崎」が実施されることもあり、同イベントとの関連を意識した構成となった。坂江は柳田の叙述とともに、福崎町域における『播磨国風土記』を紹介し、山崎は 21 年度より本事業で取り組んできた三木家との関わりから柳田の人物像にせまった。両講演とも好評を得た。なお、55 周年記念事業イベントには 6 日のみ河野が出席した。

8 月 20・21 日に兵庫県立歴史博物館、8 月 27・28 日に歴史民俗資料館にて史料調査を実施した。その成果を平成 23 年度共同研究報告書別冊『ふくさき再発見～歴史をたずねて～』としてまとめるとともに、歴史民俗資料館の秋の特別展『民俗学のふるさと福崎～幼き國男に刻まれた福崎文化～』（2011/10/21～11/23）及び企画展『ふるさと再発見～地域資料は郷土のたから～』（2012/3/3～31）に反映した。

さらに 2012 年 3 月 10 日には企画展と同タイトルの共同研究報告会を実施、町民の方への研究成果の還元に努めた。

また昨年度公開した WEB ページ「ふくさきの歴史～大庄屋三木家～」

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/fukusaki/index.html> に最新成果として昨年度事業内容の情報発信を行ったが、現在更新が滞っている状態であり、定期的な情報発信は昨年度に引き続き課題として残っている。

また福崎町広報誌『広報ふくさき』にて、ほぼ隔月で記事を寄稿し（2011 年 5・7・10・12 月号・2012 年 2 月号）、三木家や福崎町の歴史の解説を行った。（文責・河野未央）

佐用町との連携事業

佐用町（教育委員会文化財担当者・藤木透氏）との間では、昨年度から本格的な連携事業が始まった。

今年度も、「佐用町文化遺産再発見活性化事業」（文化庁・文化芸術振興費補助金「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」平成 23 年 7 月～平成 25 年 3 月）の一環として、つぎのような活動をおこなった。

(1) 高校生向け企画①

2011年7月12日、佐用高校にて、松下正和氏（近大姫路大学講師）が「災害から地域の歴史資料を救う—2009年・2011年—」、坂江渉が「佐用の地名のいわれと歴史文化—風土記の神話—」という講演をおこない、同高2年生70名に対し、佐用町内の歴史資料の保全・活用や地元伝承を継承していくことの重要性などを喚起した。

(2) 高校生向け企画②

2011年8月1日、佐用高校同窓会館にて、水損した歴史資料の救済保全をめぐるワークショップを実施して、参加した生徒5名に対して、古文書等を自ら手で守っていくことの大切などを訴えた（講師は松下正和氏）。



(3) 市民向け企画

2011年9月27日～28日、佐用郡地域史研究会メンバーのほか募集した市民に対して、町内で見つかった襖の下張り文書の取り扱い、襖資料の解体の仕方、その活用をめぐる講義、およびワークショップを実施した。襖資料については、この間、三木市やたつの市内においてさまざまな形で保全・活用事業を展開しており、本企画では、板垣貴志特命助教が、三木市内の旧玉置家住宅内での活用事例の紹介をおこなった。

(4) 本年度事業のまとめと発表会

2012年2月26日、佐用町東徳久のセンターひまわり会議室にて、上記の発表会をおこない、松下正和氏・竹本敬一氏と坂江渉が、本年度の事業のまとめと今後の事業の課題や可能性について述べた。そのうち松下氏と坂江が、兵庫県内各地での歴史資料の活用事例を紹介したのを受けて、参加者が来年度以降、具体的なまちづくり事業に乗り出すことの重要性を述べるなど、全体として意

義ある発表会となった。次年度はここでの議論を踏まえ、地域活性化に向けてより具体的な成果をあげていくことが重要になると思われる。

（文責・坂江渉）

『三田市史』の編纂

刊行中の『三田市史』の最終巻となる通史編2・近代現代が、今年度中に刊行されることとなった。この事業にはセンター関係教員のうち3人が調査・執筆に携わり、今年度内はもっぱら通史編2の執筆・校正に従事した。

今後、『三田市史』の活用が課題となるが、三田市史編さん担当部門の今後も含めて、まだ三田市で明確な方針が打ち出されていないため、来年度は引き続き編さん担当者との連絡を密にしつつ、活用に向けての方策を検討していきたい。

（文責・河島真）

『香寺町史』の編纂と活用事業

(1) 香寺町史研究室との連携

香寺町史研究室が当センターと連携して発足2年目、香寺歴史研究会や地元自治会と提携を図りながら、古文書入門講座の開設や八葉寺文書の編纂にも取り組んでいる。

とりわけ、今年度は懸案の『香寺町史 村の歴史』通史編が刊行され、10月23日、当センターとの共催で町史完成記念シンポジウムが開催された。

シンポジウムでは姫路市教育次長の挨拶、大槻の町史刊行報告のあと、大山喬平元町史編集委員長の基調講演「『香寺町史』の記憶」があった。大山氏は、『村の記憶』はもう一つのストーリーの方法を提示したものであったが、事業そのものは、その村が崩壊する、平成の大合併の功罪が問われるケースであったとも述べる。

6人のパネリストによるパネルディスカッションは奥村氏の司会で進められ、前半では、執筆者として坂江・添田両氏が町史の内容を述べながら香寺地域の歴史遺産の特色に触れ、後半では会場からも積極的な発言を受けながら、町史を今後どう活用していくかをめぐって意見が交わされた。

町史通史編刊行を受けて、新たに「町史を読む会」（第4次）が企画された。今回は次年度にか

けて8回実施の予定である。毎回、受講者には講読範囲を予告し、下読みしたうえでの積極的な参加を求めている。受講申込者は28人。

今年度は2回、1月と2月に実施された。第1回は1月19日、テーマは「古代の人々の信仰」（古代）、担当は古市講師、出席者23人。第2回は2月14日、「荘園と公領」（中世）をテーマに担当は樋口講師、受講者19人。毎回、活発な質疑や意見交換がみられた。

町史の成果を各集落にひろげようとする大字誌編纂の動きも広がっている。昨年度のフォーラム「大字誌を作ろう」に続いて、本年度は7月1日、「大字誌勉強会」が行われた。編纂に向けて動き始めている北恒屋・土師・岩部・中仁野の4集落が集まり、現状を報告しあい、今後の進めかたを協議した。

その後の動きを報告する研究発表会が当連携センターと共催で2月16日に開かれた。発表したのは土師集落で、屋号から生業、墓碑から先人を探るといふ地域に密着した調査内容はその全体構想とともに注目をひいた。坂江氏の講演「地域歴史遺産の活用事例」は具体的で参考としたいと受け止められた。また、特別報告として三木市の進藤氏から久留美村史編纂の紹介があった。

現在、姫路市、ひいては西播磨での活動拠点が構築できないかと姫路市の関係部局（市長部局・市教委）との接触を続け、連携の方向を探っている（11月17日、12月27日）。当面は町史史料の保存と公開が課題となる。

（文責・大槻守）

（2）地域史惣寄合報告集の刊行

地域史惣寄合は、2010年7月10日・11日に兵庫県姫路市・日本城郭センターにおいて開催された。その際、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが共催にあたったという経緯から、この報告集も同センター報告書別冊『第二回地域史惣寄合報告集 地域史と住民・自治体・大学』（地域史惣寄合呼びかけ人編）として刊行する運びとなった（呼びかけ人は吉田伸行・塚田孝・大槻守・奥村弘氏）。

本年度は前田と古市が中心となって編集にあたり、2012年3月末に刊行する予定となっている。本書は国公立大学の地域連携関連部局や歴史関連講座のある諸大学図書館を中心に配布される予定である。

（文責・前田結城）

第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

（1）災害対応関連

2011年3月11日に発生した東日本大震災および翌日の長野県栄村地震を受け、当センターは史料ネットに協力して、センターのスタッフが被災地入りして被災した歴史資料の救出活動を支援した。現在も支援は継続中である。

また、2011年9月に発生した台風12号は、和歌山県を中心に住宅被害・人的被害をもたらした。兵庫県下でも被害が出ているとの情報を受けて、当センターは史料ネットと協力し、県下被災地の状況把握を行った。



2011年9月9日には、地元自治体と連絡をとりながら加西市、加古川市、高砂市を巡検し、法華山一乗寺（加西市）と長楽寺（加古川市）で地滑り被害の状況を視察した。また、高砂市史編纂室の高松・清水両氏と高砂市域の浸水地を巡検した。いずれも建物被害は甚大であったが、歴史資料の無事を確認できた。

今後とも、生活復興と密接な関連をもつ資料保存の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていきたい。

（文責・板垣貴志）

（2）神戸市兵庫区平野地区における活動

平野地区での活動の中心は、「奥平野古文書勉強会」への参加である。2010年2月に第1回目を行って以来、ほぼ1ヶ月に1回のペースで開催